

街をあるいて地域力を発見！

1 Work shop

青山まちあるき ワークショップ

行政機関とNPOとのパートナーシップがさまざまな分野で求められています。環境教育の現場でも、行政機関とNPOとのパートナーシップが「地域の活力」を引き出す手段として着目されています。地域の環境を守り育てるため、普及啓発による環境施策の浸透を求めるやりかたから、地域を構成するさまざまな人や組織が主役となり環境を守る連携・協調の「しくみ」を作りあげていく方式へと、転換が求められているのです。

地球環境パートナーシッププラザでは、今回地域に住む立場や考え方の違うさまざまな人たちと合意形成をするノウハウのひとつであるワークショップの手法・技術を紹介します。



まちあるきの舞台となった青山界限

■目的

- 「環境」をキーワードに青山のまちを実際に廻ることで、地域を新しい切り口で再発見する視点を磨く。
- 多様な価値観を持つ人の合意形成の手法のひとつである「ワークショップ」の手法を学び、実践で使える技術を身につける。

■配慮したこと

- 2時間半という短い時間、そして、全国からの参加者を対象としていたので、事前に青山の「簡易地図」を提供しました。
- 「自分が発見する」ことを重視したので、まちあるきのテーマもグループも参加者自身の感じている課題の中から選びました。
- 全国からの参加者同士が関心のあるテーマを共有し、相互にアドバイスしあう関係を形成するために、「ポスターセッション」の時間を設けました。
- 実際には青山のまちを歩きながらも、本当に必要なのは自分達の地域で環境学習プログラム実施者にまちあるきをしてもらう事なので、青山固有のテーマに縛られないように心がけました。
- 「ポスターセッション」の後、地域に戻ってからの環境学習プログラムづくりへのヒントにしてもらうため、1996年に地球環境パートナーシッププラザで実施した環境学習プログラムと西宮市の資料をおみやげ資料として持ち帰ってもらいました。



グループで発見したことを発表

■流れ

9:50-9:55	ファシリテーター紹介
9:55-10:00	オリエンテーション
10:00-10:15	参加者自己紹介+アイスブレイキング（グループ分け） 自己紹介（環境教育分野で一番関心のあること）後、自分の趣味が穏やかか激しいかの程度によって一列に並び、3グループに分かれました。
10:15-10:35	グループワーク1 プレゼンストーミング チーム対抗「環境」と聞いて思い浮かべるキーワードを列挙していく。
10:35-10:45	グループづくり 地元で見つけたい環境学習スポットのテーマを選び、似たテーマの人同士でグループを作る。グループで青山の町を廻る作戦準備。
10:45-11:45	グループワーク2 まちあるき 視点ごとに街を歩く「体験、発見、ほっとけん」の精神。実際に、歩いてグループで発見したものについて話し合い、模造紙にまとめる。
11:45-12:15	まちあるきの発表+わちあい グループ単位での発表。予測と実際に歩いた時と違いや実際に感じたことなど。
12:15-12:45	ポスターセッション（各自） 自分の地域の環境スポットと人材をあげ、マトリックスを作成し環境教育施策としてできそうなことを列挙。 できた人から貼付し、メンバのポスターへコメントを差し挟む。
12:45-13:55	ふりかえり

■グループ作業で出てきた回答

●青山ごみリサイクル美化漫遊マップ

ゴミステーションや店の分別回収状況のチェック。

花や緑を飾る習慣を持つ気持ちのいい住宅街と、環境配慮型商品を置く商店が混在するのが青山の特徴。

●グリーンマップ

まちづくり・町並み・美観を切り口に歩いた。

緑が多くしゃれた建物に緑がマッチしているという、都会のモデルという形で推奨のまち。都会の街づくりの典型として使える。

●青山グリーンマップ

人工的な緑と自然の緑を探したが、人工的な緑が多かった。土のある場所では大きな木があり、アスファルトのところには、鉢植えをおいて、緑を店や住宅でうまく活用している。



グループでの作業

■ふりかえりシートから（抜粋）

ワークショップ体験について

- 自分の視野が狭いことを感じた。何にでも興味を持ち、さまざまな視点から物事を考えてみたい。
- 人によって気づくポイントは違う。意見を出してもらうことが大切であることに気づいた。多くの人の意見に配慮した生活をしたい。
- ワークショップ方式は環境保全活動へ誘導する重要な手段。合意形成の手法や具体的な段取りを学んだので業務に生かしていきたい。

青山まちあるきについて

- テーマ（ゴミ・リサイクル・美化）を持ってまちを歩くと、これまで見えなかった環境について学ぶ・考えるスポットが発見できた。
- 「まちあるき」によって青山のまちがより身近に感じられた。

他県との横のつながりについて

- 同じ気持ちを持つ他県の担当者と話ができ、連帯感を感じられた。
- 環境学習の分野における他県での取り組みが進んでいることを知りました。今後は他自治体の取り組みや NPO の取り組みについてより深く情報収集したい。

今後の活動について声

- 同じ気持ちを持つ他県の担当者と話ができて、連帯感を感じられた。
- 視点を決めて、自分の地域を見直ししてみたい。
- 今あるツール、人材、テーマを組み合わせ、面白い環境教育プログラムをつくりたい。
- ワークショップのファシリテーターの勉強をしたい。

■スタッフのまとめ

- 2時間30分という短時間で、「まちあるき」からまちづくりプランへ展開していくことを狙った、欲張りなプログラムだった為、個々のワークでの思考の深まりは不十分だったが、流れの全体像を示すことはできた。実際に、自分達の地域で「まちあるき」を実施し施行する際のヒントは提供できた。
- ワークショップの時間の中では途中で終了した環境学習プログラムのプランづくりが、その後のメーリングリストの中で話題となり展開をしているので、関心を喚起することはできたと思われる。
- ふりかえりシートを見る限り、人々の意見が多様であることによるまちづくりのイメージの豊かさや合意形成の必要性、そのノウハウとしてのワークショップの有効性については伝わっていると思われる。

■参加者リスト（12名）

札幌市環境活動推進課	西尾 香奈子
青森県環境政策課	奈良 尚之
秋田県環境政策課	角田 昭
岩手県環境生活企画室	黒田 農
茨城県環境政策課	廣瀬 史明
栃木県環境政策課	佐藤 臣恵
福井県環境政策課	内田 博幸
大阪府環境情報センター	尾崎 秀忠
山口県環境政策課	三浦 千賀子
大分県生活環境課	村井みゆき
宮崎県環境政策課	今村 俊久
環境省 北越地区環境対策調査官事務所	横川 嘉昭

■スタッフ紹介

●三崎 修 (ECOM)

ワークショップの一番のポイントは互いの違いに気づくことでしょう。違いを認め合いその上で何ができるかを考えることから協働は始まります。単なる学習の場に終わらせずに気付いたことを行動に結びつけ活動の輪を広げるよう促すことが大事です。プログラムを考えるとときはそのプログラムの構成を考えるだけでなく、どのような立場の人に参加してもらうか、その人たちの参加をどう促すか。そして次の行動へどう結びつけるかといった大きな流れの中にプログラムを位置づけ計画を練ることが肝要です。

●須藤美智子

地域の特性を探することは、新しい視点で町を見つめること。唯一、青山を地元とする私は企画段階で、「わが町のあるもの探し」を体験することができました。今回のワークショップを通じて、この視点を、参加者の方々がそれぞれの「わが町」に持ち帰り、地域の力を発掘するきっかけになれば幸いです。

●小野亜由美

水俣市の“あるもの探し”や西宮市の環境学習都市宣言に触れて是非このエッセンスを伝えたいと企画しました。「ワークショップ」は体験するばかりで企画は初めてでしたが、経験豊かなゲストや青山という地元を愛するスタッフの力で実現できました。ファシリテーション技術は、目に見えないみんなの思いを引出して見える形にするもの。自分自身、今後も勉強していきたいです。